

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

抑うつに対する、心配と反すうの個別性に着目した
メタ認知療法的理解

A Metacognitive Therapeutic Understanding of Depression, Focusing on
the Individuality of Worry and Rumination.

2021 年 1 月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

池田 寛人

IKEDA, Hiroto

研究指導担当教員： 熊野 宏昭 教授

抑うつ傾向者の特徴として、ネガティブかつ反復的な思考（心配や反すう）があげられる。心配と反すうは、これまでその共通性に関して注目が集められ、横断的な介入がなされることが多かった。抑うつに対して有効性が示されているメタ認知療法（metacognitive therapy: MCT; Wells, 2009）も、そのひとつである。MCTでは心配と反すうに対して、より下位の処理である能動的な注意制御機能の低下、が関与することで抑うつが維持されると考え、独自の情報処理理論に基づいて説明がなされてきた。なお、MCTのなかでは、能動的な注意制御機能の低下は、しばしば自動的な注意バイアスの亢進と同一視され、同レベルの処理プロセスとして説明されている（e.g., Wells, 2012）。しかしながら注意バイアスの定義をした Cisler & Koster (2010) や、MCTと同じ構造で情報処理プロセスを説明した Baddeley (2012) を参照すると、能動的な注意制御機能の低下と、注意バイアスは異なるレベルの処理として理解することが出来る可能性が考えられる。その場合、心配は注意バイアスが特徴的であり（Stout et al., 2015）、反すうには注意制御機能の低下が関連する（Altamirano et al., 2010）可能性が示唆されていることから、抑うつ傾向者でも心配と反すうでは維持プロセスについて異なる理解が必要である可能性が考えられる。そこで本博士論文は、抑うつ症状において心配と反すうでは、関与する要因が異なることを示すことで、抑うつ症状における心配、反すうの維持プロセスの違いに関する実証的な示唆を得るために、検討を行うことを目的とした。なお、本博士学位論部は全6章で構成されている。

第1章では、抑うつ傾向者の心配と反すうに関して、メタ認知療法を含めた情報処理理論に関する先行研究を概観し、整理した。その結果、メタ認知療法における情報処理プロセスに関する理解の中で、注意制御機能と注意バイアスを整理することで、抑うつ傾向者の心配と反すうに関してより個別的に理解できる可能性が考えられた。

第2章では、先行研究から考えられる課題点と、本研究の目的について整理をした。先行研究の課題点は、以下のようにまとめられた：①メタ認知療法の中で、抑うつに対する心配の関与が理論的理解に留まっている、②心配に対しては注意制御機能の低下が関与しないが、反すうに対しては注意制御機能の低下が関与するなど、違いがあることが明示されていない、③抑うつ傾向者の心配と反すうに対する、注意制御機能の低下と注意バイアスの関連性が示されていない。またその上で、抑うつ傾向者が心配と反すうの程度に従って分類可能であることが、補足的に示される必要があると考えられた。そこで本研究では、抑うつ傾向者の心配と注意バイアス、反すうと注意制御機能の低下の関連性について検討を行うことで、抑うつ傾向者の心配と反すうを個別的に理解するための示唆を得ることを目的とした。

第3章では、Papageorgiou & Wells (2001) が作成した抑うつのメタ認知モデルを参考に、心配と反すう、心配（反すう）に関するメタ認知的信念が抑うつに与える影響性について、検討を行った（研究1）。収集された大学生184名分のデータを対象に、共分散構造分析を行った結果、心配（反すう）に関するポジティブ/ネガティブな信念が、心配と反すうに正の影響を与え、心配と反すうが、抑うつに影響を与えるモデルで十分な適合度が得られた。第3章の結果、抑うつにおける心配と反すう、メタ認知的信念の影響関係が実証された。

第4章では、注意制御機能の低下が、心配に対しては関連していないが、反すうに対しては関連していることが示されるのかどうか、について検討を行った。まず、研究2-1で調査研究を行い、大学生157名分のデータを収集した。共分散構造分析を行い、抑うつと心配、反すう、メタ認知的信念の影響関係のなかでも、注意制御機能が心配と反すうに関与していることが示されるかどうか、検討を行った。結果として、心配には注意制御機能の低さは関連していない一方、反すうには「注意の維持」の低さが関連してい

る可能性が示唆された。こうした関連性の違いが実験でも示されるのか、研究 2-2 を行った。大学生 24 名を対象にして、実験を行った。実験では、注意の維持の低さを測定するために、ディストラクターがある場合に、ない場合よりも、ターゲットに対する処理が低い傾向があるのかどうか、確認することができる「フィルタリングコスト課題」を行った。結果として、心配にはいずれの課題成績とも有意な相関を示さなかった。一方反すうは、「注意の維持」の低さが関連している可能性が示された。よって、研究 2-2 の結果、研究 2-1 の結果は概ね実験で再現されたと考えられた。第 4 章の結果、心配には注意制御機能の低下が関連している可能性が示唆されたが、反すうには注意制御機能の低下が関連している可能性が示唆された。

第 5 章では、抑うつ傾向者においても、心配には注意バイアスが関連している一方、反すうには注意制御機能の低下が関連しているといえそうかどうか、検討を行った。まず抑うつ傾向者においても、注意制御機能の低さは、心配には関連性を示さないが、反すうには関連性を示すのかどうか、抑うつ傾向の基準を満たした大学生 30 名を対象として実験を行った。注意制御機能を測定する課題として、研究 2-2 と同様の課題を用いた。結果として、注意の維持の低さと心配の間に有意な負の相関が、注意の維持の低さと反すうの間に有意な正の相関が示され、抑うつ傾向者では注意制御機能の低下は反すうの亢進に関わっている可能性が示唆された。研究 3-2 では、抑うつ傾向者において、注意バイアスは心配には関連するが、反すうには関連しないことが示されるのかどうか、抑うつ傾向者の基準を満たした大学生 30 名を対象に実験を行った。注意バイアスを測定するために、脅威的な刺激を探索する方が、中性刺激を探索するよりも、反応が拙速な傾向があるかどうか、確認することができる「修正版視覚探索課題」を用いた。また、脅威的な刺激に対して混乱が生じるかどうか、確認するためにエラー数も取得した。結果として、心配には課題のエラー数が有意な正の相関を示した。注意バイアスは、心配に関するポジティブな信念とのみ、有意な正の相関を示した。反すうや反すうに関するポジティブな信念は注意バイアスと関連していなかったことから、抑うつ傾向者において注意バイアスは、心配の制御プロセスに特徴的である可能性が示唆された。第 5 章の結果、抑うつ傾向者において、心配の制御プロセスでは注意バイアスが、反すうの制御プロセスでは注意制御機能の低下が、関与している可能性が得られた。

補足的な検討として、これまでの研究で得られた知見が、抑うつ傾向者の個別的な理解に寄与するのかがどうか確認するために、抑うつ傾向者が心配と反すうの程度ごとに分類可能かどうか、検討を行った。研究 1 から研究 3-2 までのデータから、抑うつ傾向者の基準を満たした 177 名分のデータを抽出し、クラスタ分析を行った。結果として、抑うつ傾向者は①心配と反すう両方が平均を上回る群、②心配だけが平均を上回る群、③心配と反すう両方が平均を下回る群、にわかれた。そのため、本研究で得られた知見は、ある程度抑うつ傾向者の個別的な理解に寄与する可能性が考えられた。

第 6 章では、本博士学位論文から得られた知見と臨床的示唆について整理した。本論文の結果から、抑うつ傾向者でも心配と反すうでは制御プロセスに関与する注意の問題が異なる可能性が示され、抑うつ傾向者の中でも、心配と反すうの違いから個別的に理解することが重要である可能性が示唆された。また心配と反すうに対して、関連の仕方が異なっていたことから、注意制御機能と注意バイアスは、異なるレベルの処理である可能性も示唆された。これは、Wells (2009) が示してきた MCT における理解を整理し、さらに精緻化する可能性を示唆するものであり、人間社会の生活の質全般を向上させることを目指す人間科学の発展に寄与し得るものだと考えられる。今後は本論文の限界点を踏まえた上で、本論文で得られた知見が実際の臨床場面で応用可能かどうか、確認を進める必要があると考えられる。